

謎の石器 楔形石器

横芝光町教育委員会

はじめに

千葉県には旧石器時代の遺跡が現在2,000以上を数え、全国で最も多く所在すると言っても良い。それは旧石器時代の遺物が出土する地層が、県北部を占める下総台地では地表から1～2m程度と、比較的発見しやすいと言うことが最大の要因であろうが、その反面重層的に遺物が出土した場合、出土層位の判別を難しくしている。また、様々な石器が発見され、多様な石器文化—石器群が存在することが明らかになっていることから、千葉県の旧石器文化を一言で言い表せなくなっている。今回、ここで紹介する楔形石器についても、下総台地東部で濃厚に分布し、西部へ行くに従って希薄になるばかりでなく、他の地域ではほとんど目にすることのできない石器である。そのような特異な石器を有する石器群が、なぜある地域に分布するのか、また歴史的な動態がどうであったか、その結果としてそれが一つの文化圏を形成しているのか、さらにこの石器の持つ形とこれを作る技術について考察するため、楔形石器を集め、改めて比較検討したい。

楔形石器は、別名両極石器、またフランス語でピエス・エスキュと呼ばれ、世界各地で出土する普遍的な石器であるとも言える。また、国内では後期旧石器時代の初期段階にすでに出現し、縄文時代にまで存在する稀有な石器である。その形は、多くが方形で、正面から見た時、上と下とから剥離がされ、その断面を見たとき円盤状で、鍬の留め具や石割に使う“楔”的”のようであることから、その名が付けられた。当初は剥片を取る石核とか、石器を作る途中の未成品と考えられたこともあったが、今日では下総台地東部のように、地域的なまとまりを有して安定的に存在することから、ある石器であるとの見方が有力になっている。ここでは、道澤(2017)に基づき、楔形石器の完成形とその未成品とをあわせて楔形石器石器群として取り上げ、その資料をできるだけ集め、見なおすことにした。ここで楔形石器について結論が出せるわけではないが、今後の旧石器時代研究に繋げていければ幸いです。

目 次

はじめに

目次

1. 楔形石器とは-----	1
2. 楔形石器の分布-----	1
3. 各遺跡の楔形石器	
遠山天ノ作遺跡-----	4
長倉宮ノ前遺跡-----	17
寺方古墳群-----	18
中台柿谷遺跡-----	21
鍛冶屋台遺跡-----	22
四ツ塚遺跡-----	23
赤羽遺跡-----	24
鷺山入遺跡-----	26
千田台遺跡-----	29
出口遺跡-----	30
東峰御幸畑西遺跡-----	31
大林遺跡-----	31
草刈遺跡-----	32
4. 縄文時代の楔形石器-----	32
5. 千葉県旧石器時代楔形石器の考察	
(1) 楔形石器の形態-----	34
(2) 楔形石器の地域分布と時間的分布-----	35
(3) 楔形石器の制作方法-----	36

おわりに

本書は、令和元年10月5日から12月15日まで、横芝光町民ギャラリーで開催された企画展「謎の石器 楔形石器」の図録である。

本書の執筆・編集は横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班文化財・ギャラリー担当道澤明があたった。

1. 楔形石器とは

楔形石器ははじめにも述べたように、方形で上下から剥離を加えて、上下断面形が円盤状になっている形である。これを実例実測図に示すと右の様な形であり、形態としては比較的単純で、旧石器時代から縄文時代まで、また日本のみならず世界中に分布し、旧石器時代研究で先進的なフランス語でピエス・エスキューと呼ばれる。この石器の制作は、比較的扁平な素材(剥片も有り)を台石の上に置き、その素材を上から敲石で直接打撃し、打撃点と台石接地点の上下から同時に剥離(かつ表裏が同時に剥離する場合もある)することから、これを両極打法とも言われ、比較的容易な石器制作技法と云える。しかし、失敗する確率も高く、制作遺跡では多数の失敗作や未成品も出土している。

楔形石器は単純な形態であるにもかかわらず、その用途については不明な点が多く、未だによく分かっていないが、骨角や木材の分割具、あるいは石錫制作素材などが考えられている。また、石核であるとの見方もあり、これは初期の両極打法で、厚みのある素材を打割した際に、複数の剥片が得られることから、遠山天ノ作遺跡の出土例を見て、石核から楔形石器への転用ではなく、制作過程における変化ということが捉えられる。ここに集めた楔形石器の出土例を見ると、その制作過程を下のように整理することができよう。

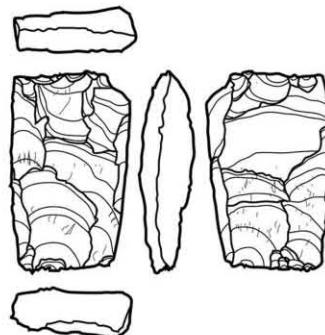


図1 楔形石器完成品実測図



図2 楔形石器の制作過程

2. 楔形石器の分布

まず、下総台地における、旧石器時代の楔形石器分布を見てみよう。図3に示した遺跡分布図は千葉県内のAT(始良丹沢火山灰)降灰以前一後期旧石器時代前半期の遺跡分布に、楔形石器出土密度を重ねて示したものである。また、表1は千葉県内の楔形石器出土遺跡の地名表である。まず表を見て頂いて気付くのは楔形石器の出土層位がVI層以下に多いことである。中にはV層より上位の石器もあるが、数は少なくなる。そこで VI層以前(AT降灰以前)に限って分布を示したのが図3である。この図では○印は楔形石器を含まず、●印は楔形石器を含み、大きい程出土点数が多い。この図を一目で見て分かるように、下総台地東部で多く、西へ行くに従って少なくなる。特に①遠山天ノ作遺跡、⑬出口遺跡、⑦赤羽遺跡では100点を超え、いずれも小円礫を素材にしている。一方で⑧鷺山入遺跡では黒曜石石材で剥片素材の楔形石器が50点あり、必ずしも素材・石材に規制されて偏在するわけでもなさそうである。つまり、一つの分布圏、言い換えれば文化圏を形成していたと考えられる。

次に他地域に目を移すと、関東では武藏野台地で高井戸東遺跡X上層で1点、武藏台遺跡Xb層で7点、相模原台地で慶應湘南藤沢キャンパス内遺跡第V文化層で7点が見られるぐらいである。さらに離れて長野県貫ノ木遺跡で264点、奈良県二上山遺跡群で321点が突出する。

縄文時代では東北地方で点々と出土し、千葉県内では聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ遺跡、草刈遺跡B区など中期の遺跡で多数出土し、本町内でも東長山野遺跡で4点、中台貝塚で7点、神山谷遺跡で2点確認された。中でも東長山野遺跡の1点は、大形で両極打撃が顕著で、明らかに楔形石器を意識的に制作している例である。

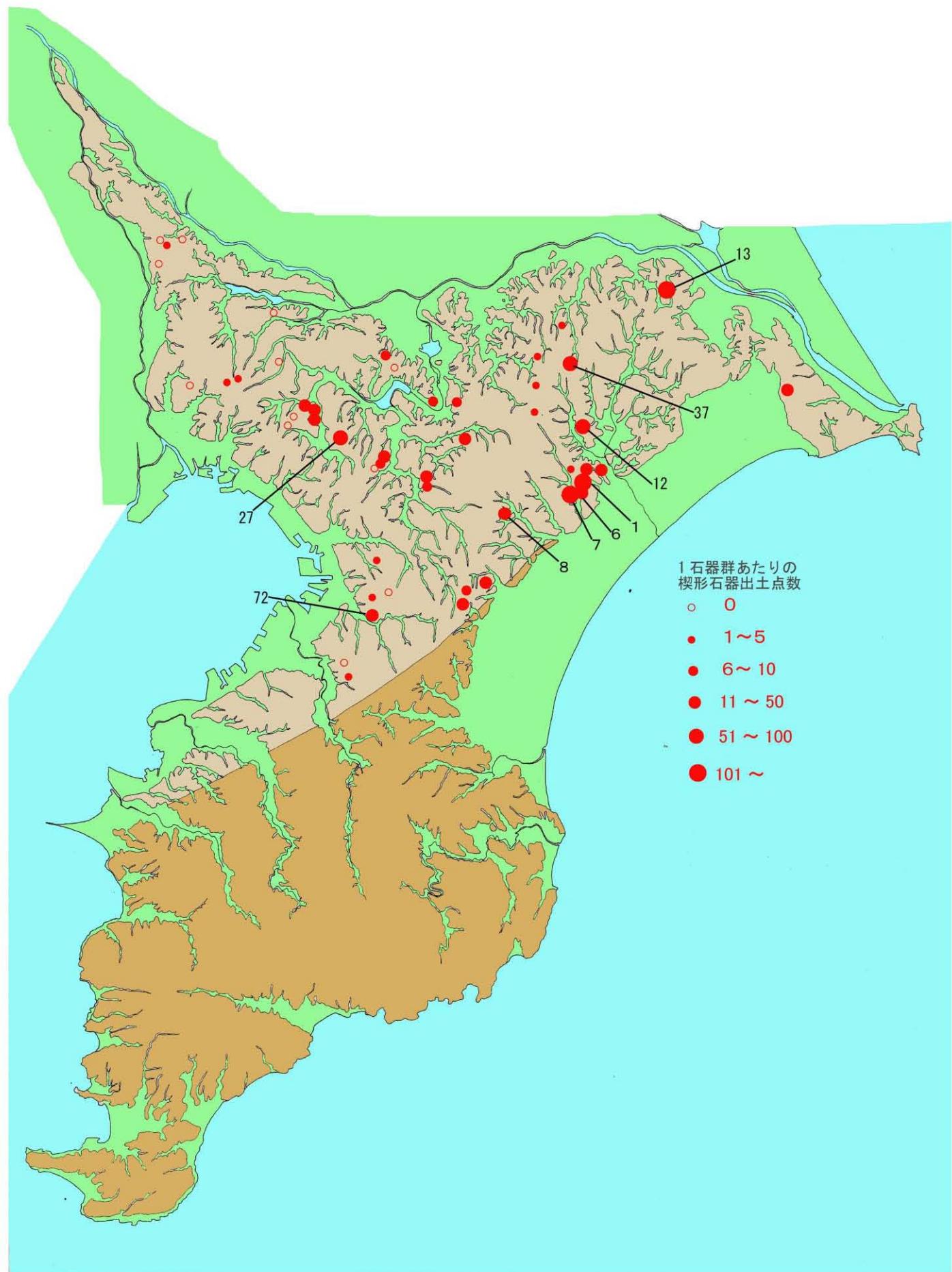


図3 千葉県内におけるAT(始良丹沢火山灰)降灰以前(後期旧石器時代前葉)の楔形石器出土遺跡分布

表1 旧石器時代～縄文草創期の下総台地の楔形石器出土遺跡

	石器群名	楔形石器	層位	集中地点数	主要石材	他の石器	所在市町村	備考
1	遠山天ノ作	129	VII～VIII	2	チャート円礫	ナイフ	横芝光町	小円礫
2	中台柿谷2	3	IV	1	黒曜石		横芝光町	
3	寺方	16	VI～VII	3	安山岩	ナイフ	横芝光町	
4	宮ノ前	11	VII	1	黒曜石・頁岩		横芝光町	
5	西長山野1	1		9	黒曜石		横芝光町	
6	四つ塚	26	IX～X	38(環プロ)	頁岩・瑪瑙・チャート	ナイフ・石斧	山武市	
7	赤羽	257	VII～IX	42以上	チャート・安山岩・頁岩	ナイフ・台形・削器・石斧	山武市	
8	鷺山入Ⅱ	50	IXa	6	黒曜石・瑪瑙・安山岩	ナイフ・削器	山武市	
9	稻荷台	5	III	4	安山岩	細石器・ナイフ	東金市	
10	針ヶ谷1	14	VII	9	黒曜石・チャート	ナイフ・削器	東金市	
11	針ヶ谷2	7	IX	1	頁岩	石斧	東金市	
12	千田台	78	VI	27	頁岩・安山岩・黒曜石	ナイフ・台形・削器	多古町	
13	出口1	178	VII～VIII	5	安山岩・チャート		香取市多田	小円礫
14	山倉大山	21	縄文草創期		安山岩・チャート	石鎌	香取市	
15	平塹2	3	VI	1	チャート・砂岩	ナイフ	旧大栄	
16	岩井安町南	37	VI～VII	2	チャート		旭市	
17	砂田中台I	29	VI	8	安山岩・黒曜石・チャート	ナイフ	東金市	
18	砂田中台IIa	1	IV上	14	玉髓	ナイフ・削器	東金市	
19	大網山田台8V	8	IX	3	チャート	石斧	大網白里市	
20	大網山田台8III	10	III	41	黒曜石・安山岩・	尖頭器・ナイフ・錐	大網白里市	
21	上引切		III	2	頁岩	ナイフ	大網白里市	
22	墨古沢南I	26	IXa	環プロ	安山岩・流紋岩	台形様石器	酒々井町	
23	栗野1	2	III	2	黒曜石・頁岩	削器	佐倉市	
24	栗野2	20	VII	10	黒曜石	ナイフ・搔・削器	佐倉市	
25	大林I	3	III	4	頁岩・凝灰岩・安山岩	細石器	佐倉市	
26	大林IV	1	IV～V	16	黒曜石・	ナイフ	佐倉市	
27	大林VI	81	VII～IXa	18	頁岩・安山岩	ナイフ	佐倉市	
28	大林VII	2	X	1	安山岩	石錐	佐倉市	
29	大堀	4	VIIa	2	頁岩・チャート	ナイフ・石斧	佐倉市	
30	芋窪	6	VI～VII	5	頁岩	ナイフ・削器	佐倉市	
31	向原2	15	IV下	9	黒曜石・安山岩	ナイフ・角錐	佐倉市	
32	飯仲金堀	10	VI	2	頁岩	ナイフ・搔器	成田市	
33	取香和田戸2	4	III～V	22	頁岩・黒曜石	ナイフ・有撃尖頭器	成田市	
34	取香和田戸4	1	V下	14	安山岩	切出・角錐	成田市	
35	取香和田戸6	2	IX	2	安山岩	台形様石器	成田市	
36	東峰御幸畠西1	11	VII～X	41	チャート・頁岩	ナイフ・台形様・石斧	成田市	
37	東峰御幸畠西2	78	VI～VII	2	チャート・凝灰岩		成田市	小円礫
38	天神峰奥の台1	1	IX	13	安山岩	台形・ナイフ・石斧	成田市	
39	天神峰奥の台3	1	IV下	15	安山岩	切出・角錐	成田市	
40	南三里塚宮原第1	4	VII～IX	48(環プロ3)	安山岩・チャート	石斧・ナイフ	成田市	
41	古込下	1	IX	1	玉髓	ナイフ・石斧	成田市	
42	平賀一の台2	7	IV下	3	黒曜石	切出・角錐・搔器	印西市	
43	宮内	7	VII	1	頁岩	ナイフ	印西市	
44	北海道2	6	V	4	黒曜石・安山岩・瑪瑙	ナイフ・搔器	八千代市	
45	北海道3	20	VI	10	頁岩・玄武岩・瑪瑙	ナイフ	八千代市	
46	ヲサル山3		VII	1	安山岩・頁岩	ナイフ	八千代市	
47	坊山4	2	VII～IXa	14	安山岩・チャート	ナイフ・削器	八千代市	
48	権現後3	1	V～VI	11	黒曜石・チャート	ナイフ・角錐	八千代市	
49	権現後4	4	VI～VIIa	9	黒曜石	ナイフ	八千代市	
50	権現後6	2	VII～VIII	2	頁岩・瑪瑙	ナイフ・石斧	八千代市	
51	白幡前4	11	IXa	11	黒曜石・流紋岩	石斧	八千代市	
52	井戸向	18	VI～VII	5	安山岩	ナイフ・削器	八千代市	
53	復山谷3		III	3	凝灰岩	ナイフ	白井市	
54	東林跡	1	VII	17	頁岩	ナイフ	鎌ヶ谷市	
55	林跡No.1～3	1	V～VI	3	凝灰岩	ナイフ	鎌ヶ谷市	
56	落山1	1	III	4		ナイフ	鎌ヶ谷市	
57	落山3	1	VII			ナイフ	鎌ヶ谷市	
58	聖人塚1	2	III	8		ナイフ・削器	柏市	
59	聖人塚3	1	VI	2		ナイフ	柏市	
60	大割2	9	IX	5	黒曜石	ナイフ	四街道市	
61	池花	2	VI	1	ホルン・砂岩	削器	四街道市	
62	大割5	1	IV上	4	安山岩	ナイフ	四街道市	
63	大割6	4	III	2	チャート	石槍	四街道市	
64	大割7	10	III	1	珪質頁岩	細石器	四街道市	
65	小屋ノ内	1	IX	環プロ、13	ホルン・	台形様石器	四街道市	
66	御山Ⅱ		X	環プロ、11		台形・石斧	四街道市	
67	出口・鐘塚1	14	IX	13	安山岩	ナイフ・石斧	四街道市	
68	荒久上		III	1	チャート・頁岩	細石器	千葉市	
69	馬の口2	1	V～VI			ナイフ・搔器	千葉市	
70	弥三郎第2	6	縄文草創期		安山岩・流紋岩・玄武岩	尖頭器・削器	千葉市	
71	美生1	1	VII	2	頁岩	錐・彫刻刀	袖ヶ浦市	
72	草刈第4文化層	38	VII～IX上	20	黒曜石・瑪瑙・頁岩	ナイフ	市原市	
73	草刈第2文化層	9	X	1	頁岩・チャート	ナイフ	市原市	
74	草刈第5文化層	10	VI	6	黒曜石・頁岩・チャート	ナイフ	市原市	
75	草刈第6文化層	2	IV	12	チャート	角錐	市原市	

3. 旧石器時代の楔形石器

遠山天ノ作遺跡

遠山天ノ作遺跡は横芝光町遠山地先にあり、昭和54年から58年にかけて(財)千葉県文化財センターによって発掘調査され、Ⅲ～VIII層から7箇所の遺物集中地点(ブロック)が検出された。その内のVII～VIII層5箇所のブロックから、129点の楔形石器を含む計1,082点が出土している(新田1988)。この石器群の中にはこのほかナイフ形石器、削器、石核、敲石、台石などを構成する。素材は円礫が多く、石材はチャートが半数近くを示め、次いで凝灰岩、安山岩、玉髓などが続く。この遠山天ノ作遺跡の石器群に真っ先に着目したのが新田浩三(1988)で、楔形石器をピエスエスキューとして、調整の度合いによって3つに分類し、素材円礫からの制作技術の段階的差によって3類型に分けた。

平成24年、千葉県から出土遺物の譲与を受け、今回の企画展示のため出土資料を再整理したところ、相当数の楔形石器が報告書に掲載されていないことが分かり、これを図化してここに載せたのが図10～18の資料である。また、図化しきれない関連する剥片等を写真のみを示した。この中で重要なのは素材面がほとんどない小型のものや、剥片素材に違いない石器がある。特に黒曜石の楔形石器が1点ある。黒曜石の楔形石器では山武市鷺山入遺跡があり、これと関連付けられるか本遺跡のナイフ形石器とあわせて再考する必要があろう。このほか形態では縦長、ほぼ方形、横長、角柱状などがあり、厚さは1cm以下で、これは用途あるいは柄への装着を考慮した結果であろう。また、大きさとしては2×2cm前後の楔形石器が、微細剥離によって整った形態で最も多くそろい、これらが完成形であろうと考えられる。ということは素材面を残す石器は未成品と考えると、大きさにばらつきがあっても齟齬はない。制作技術では多くが上下2辺の両極打撃による技法で制作されているが、中にはある段階で90度回転して両極打撃している石器もある。

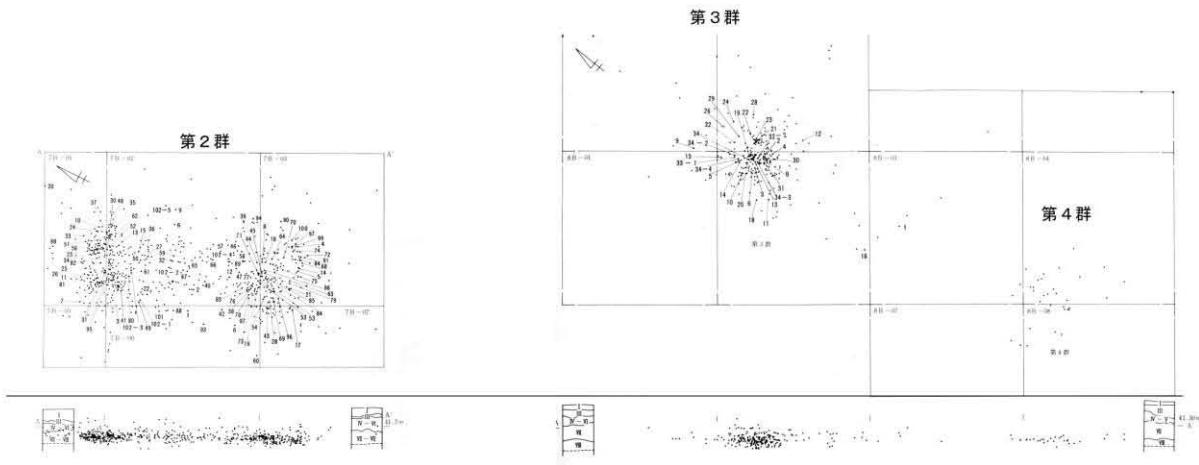


図4 遠山天ノ作遺跡VII～VIII層文化層遺物集中地点(第2～4群の位置関係)



図5 遠山天ノ作遺跡第2群出土状況写真

遠山天ノ作遺跡の遺物集中地点のうち、第1群は最も北に位置して2点のみの出土で、うち1点は敲石であった。第2群は第1群の南側に隣接して検出され、これはさらに南北に2つの集中地点に分けられる。点数は780点に及び、本遺跡では最も多い集中地点で、石器の数も多い。石器の分布を見ると、北側の方でナイフ形石器を始め、楔形石器も多く、削器も含むのに対し、南側の方は台石や敲石があり、主に南側で石器制作が行われたことを想像される。第3群は第2群から南へ10m隔てて位置し、点数360点余りで少なくなるが、ナイフ形石器、楔形石器や剥片、敲石1点がある。第4群は第3群から南へ5m程離れて位置し、点数は38点と大幅に少なくなるが、楔形石器が1点ある。

以上、本遺跡ではVII～VIII層から楔形石器を主体とする遺物集中地点が4群(5箇所)が検出された。これらの集中地点間での石器の接合関係までは確認できず、同時期性は不明であるが、石器の石材構成から見るとほぼ同時期と考えられる。

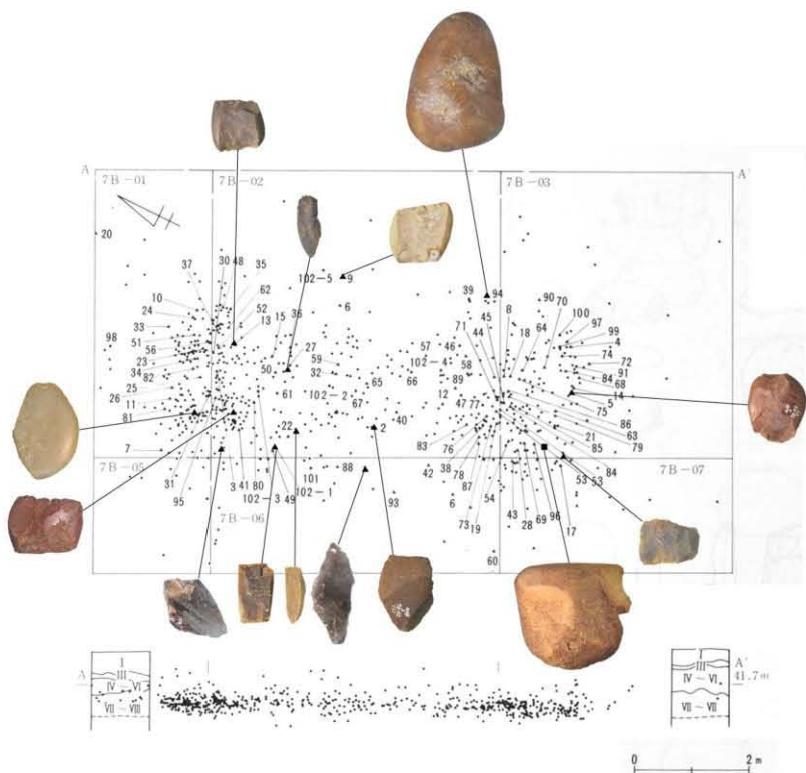


図6 遠山天ノ作遺跡第2群

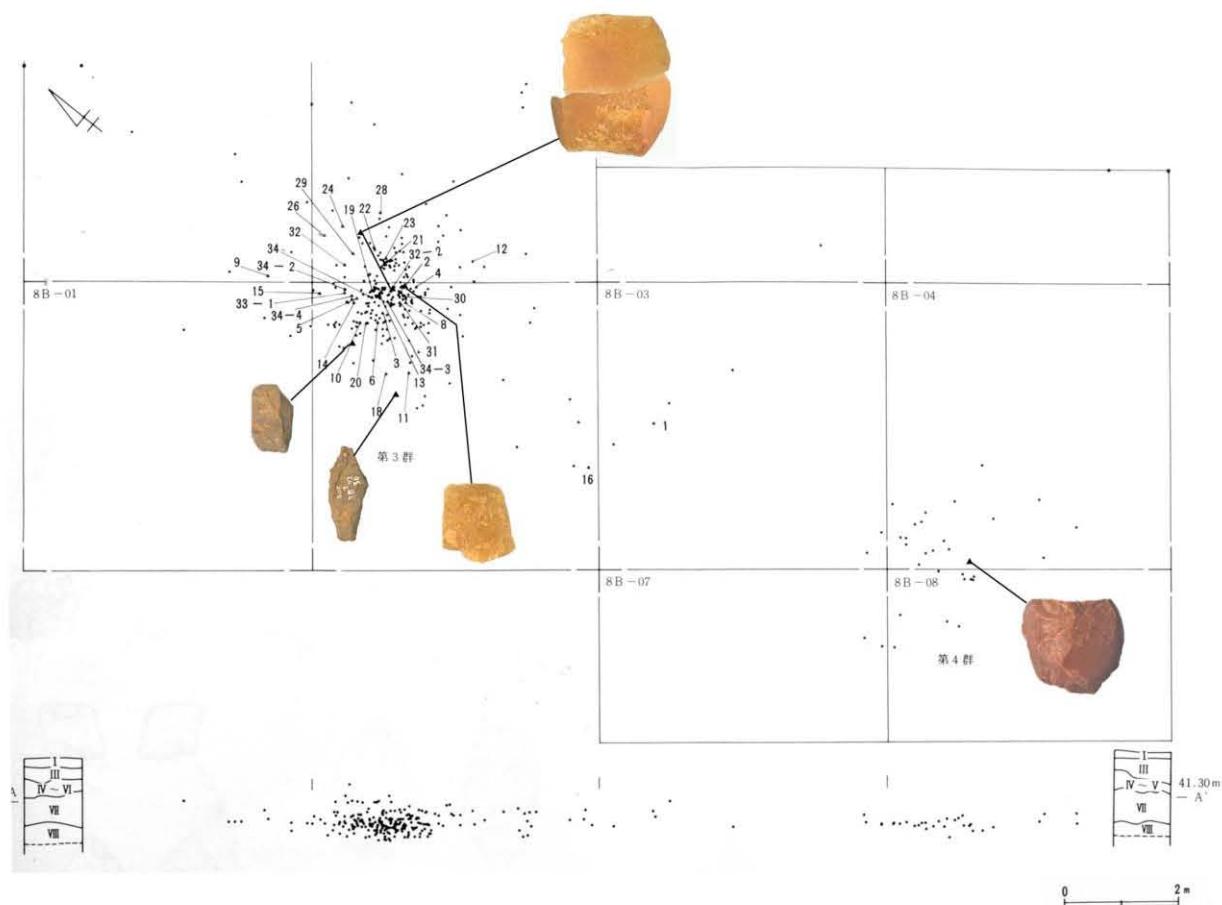


図7 遠山天ノ作遺跡第3・4群



図8 遠山天ノ作遺跡第2群出土報告書掲載石器①



図9 遠山天ノ作遺跡第1・2群出土報告書掲載石器②

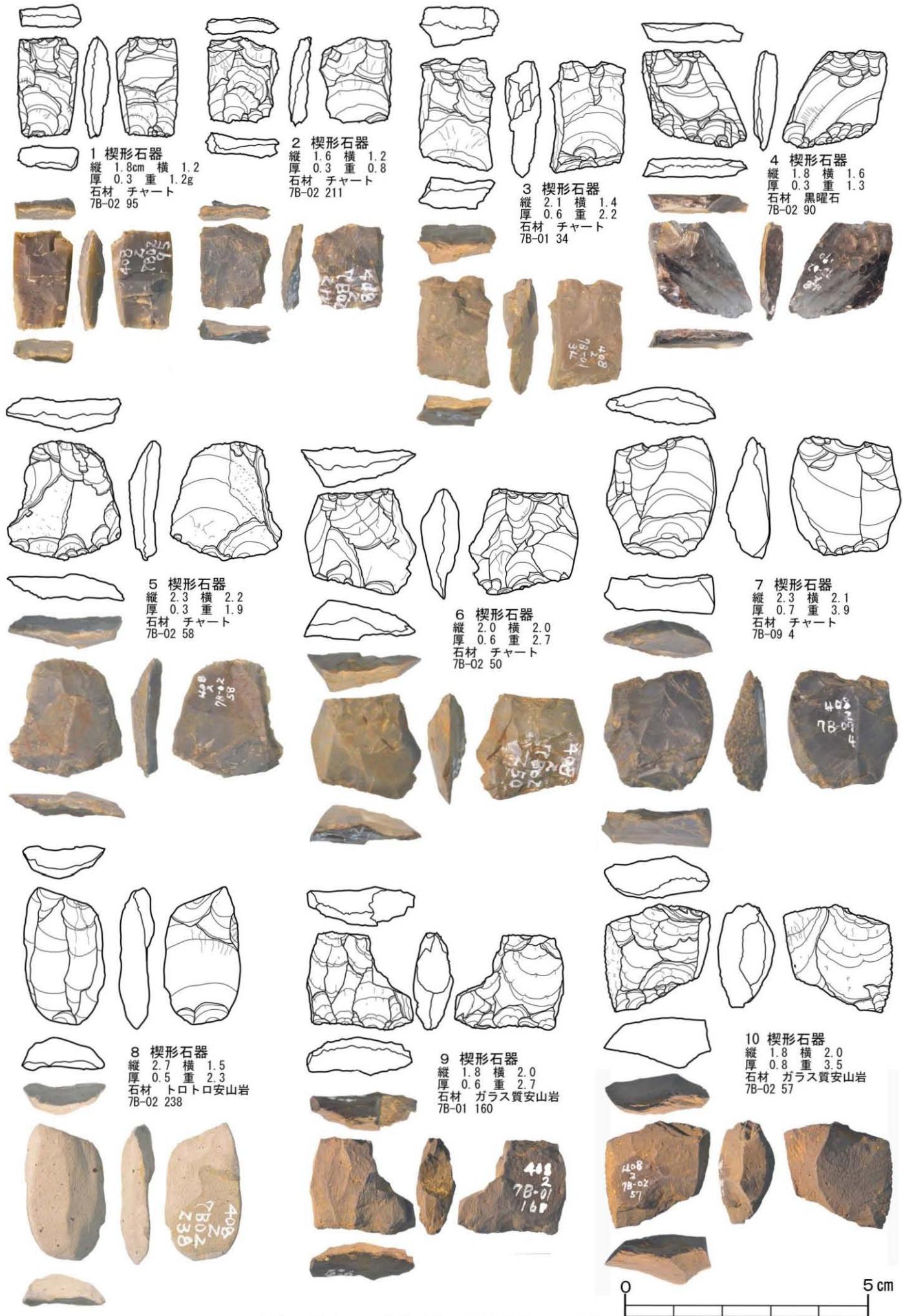


図10 遠山天ノ作遺跡第2群出土楔形石器①



図11 遠山天ノ作遺跡第2群出土楔形石器②

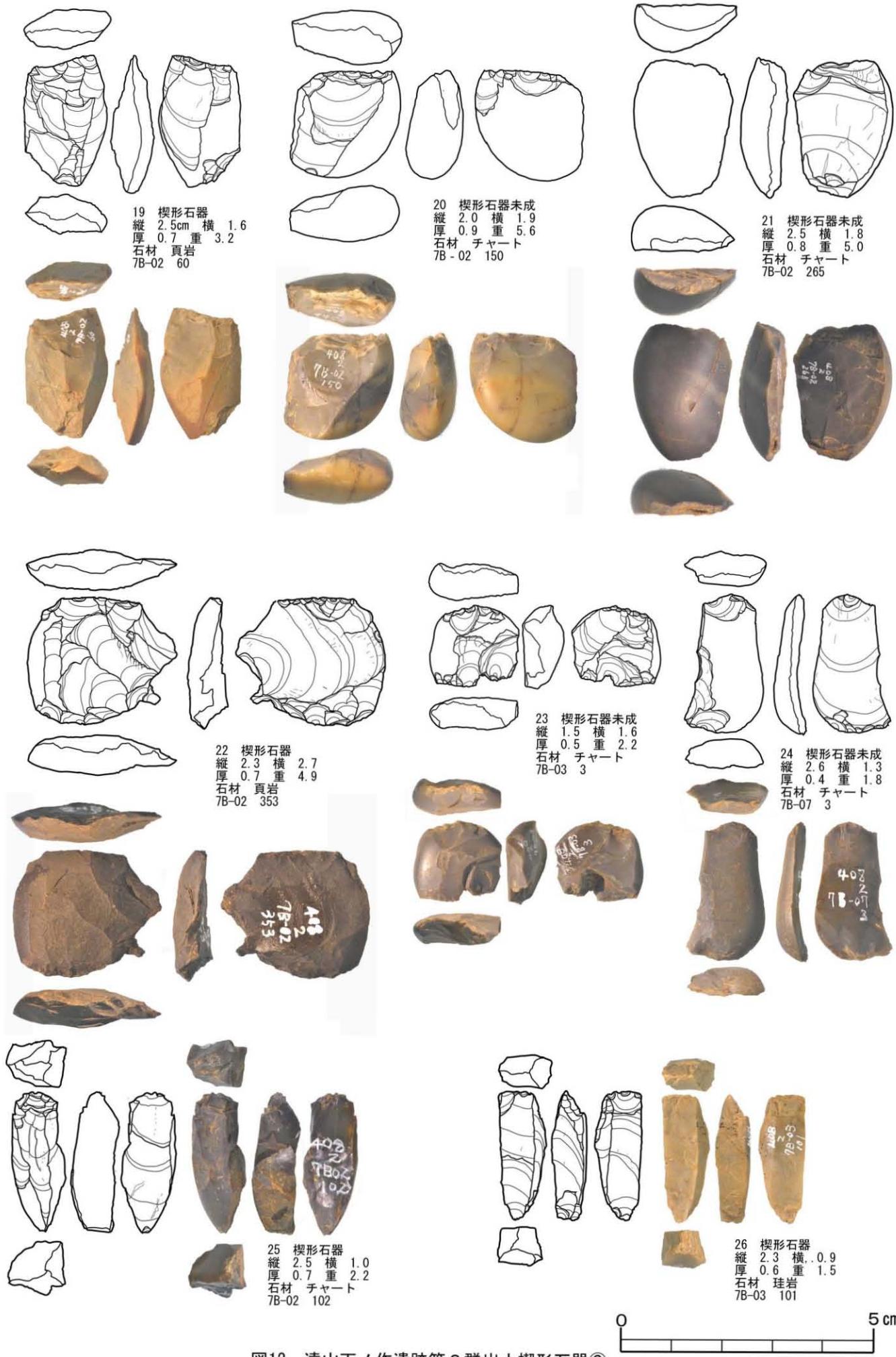


図12 遠山天ノ作遺跡第2群出土楔形石器③

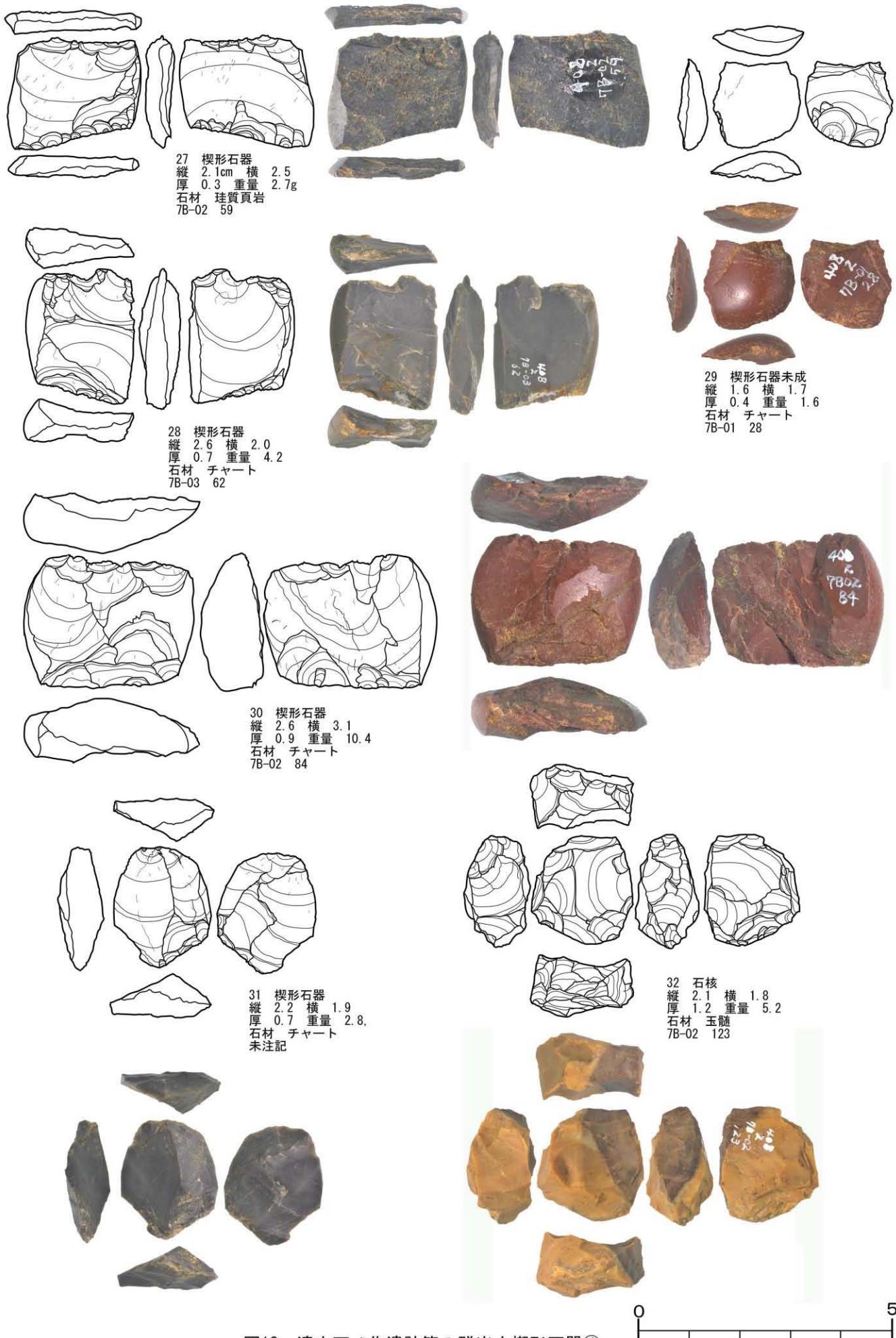


図13 遠山天ノ作遺跡第2群出土楔形石器④



図14 遠山天ノ作遺跡第2群出土その他の石器



図15 遠山天ノ作遺跡第2群出土楔形石器関連剥片①

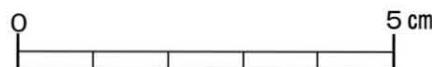




図16 遠山天ノ作遺跡第2群出土楔形石器関連剥片②

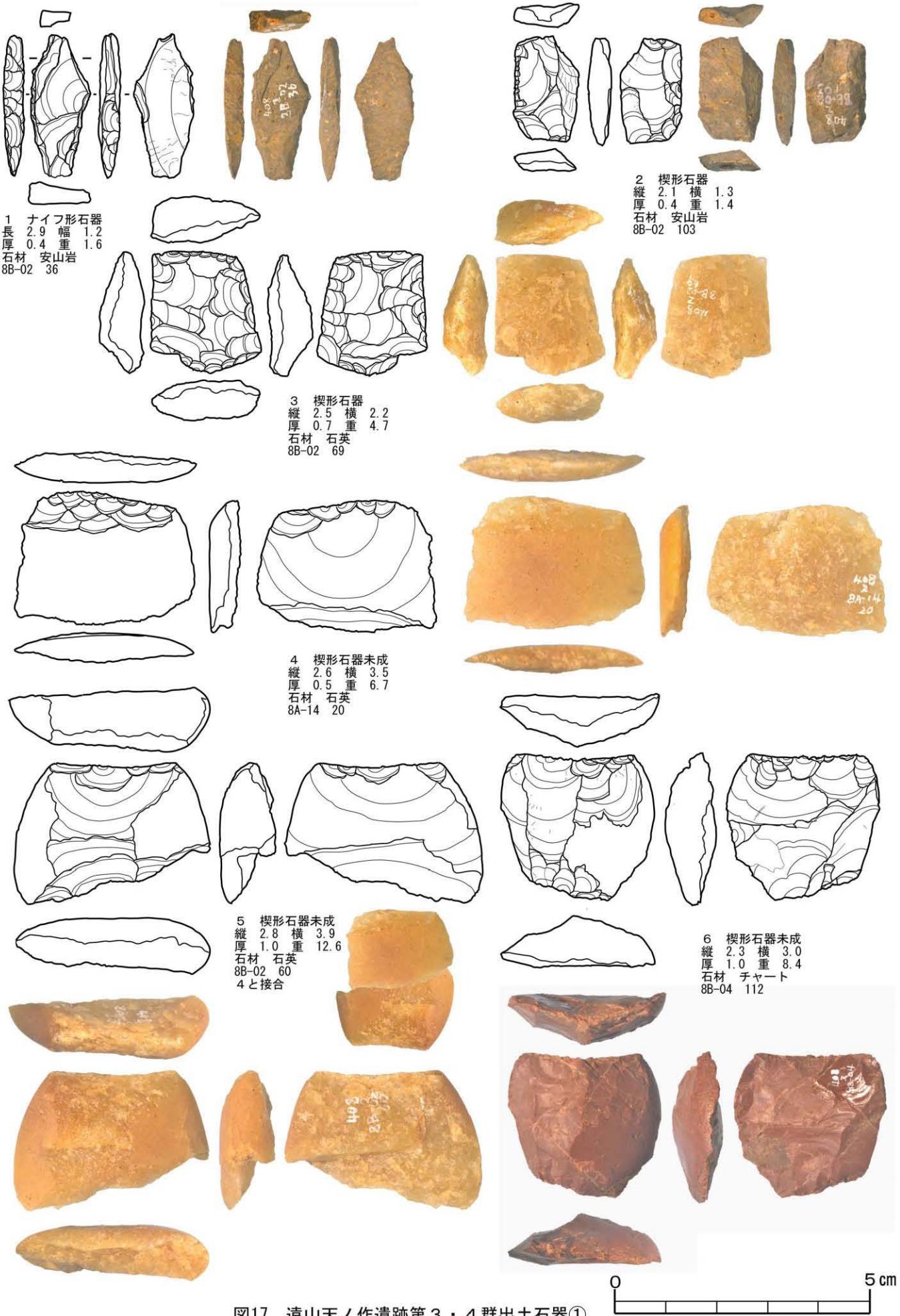


図17 遠山天ノ作遺跡第3・4群出土石器①



図18 遠山天ノ作遺跡第3・4群出土石器②

長倉宮ノ前遺跡

長倉宮ノ前遺跡は、遠山天ノ作遺跡から東へ行った開析が進んで丘陵状になった標高35mの下総上位面の台地上にあり、その最高所から東へ少し傾斜した所で、楔形石器を含む石器群が1箇所検出された。この石器群はIX層上部を出土層位として、径8mの範囲で156点が分布する小規模な遺物集中地点である。石器構成は楔形石器15点、剥片、礫等で、石材構成は黒曜石、頁岩(嶺岡産)、チャート、瑪瑙、水晶など、少數ながら多彩である。楔形石器はいずれも2cm以下で、不整形なものもあるも方形整形されているものが多い。石器素材は小剥片が多く、多くはこれを持ち込んでの石器制作を遺跡内で行ない、遺跡内での剥片剥離作業は少なかったと思われる。



図19 長倉宮ノ前遺跡出土楔形石器石器群

寺方古墳群

寺方古墳群は、東に栗山川を望む標高30mの下総下位面の台地上にあり、南北に細長く伸びた台地の、西側から沢が入って少し括れた所が発掘された。旧石器時代の遺物集中地点は、台地のほぼ中央部に3箇所検出され、いずれもVII層下位からIX層上位に属す。石器構成はナイフ形石器4点、台形石器1点、楔形石器16点、削器4点、台石1点、石刀などがあり、石材構成は安山岩が最も多く、次いでチャート、瑪瑙、頁岩がある。楔形石器は2.0～6.5cmと幅があり、比較的大きいものは形が不整形で、未完成品あるいは中には石核かと思われるものもある。また、小型のもので楔形石器としたもの(14、17)は疑問である。おおむね2～3cmのものが、方形整形されていて、楔形石器として完成された石器と思われる。楔形石器の素材では小円礫ではなく、剥片か安山岩では拳大以上の礫から剥片剥離した石刀を利用したと思われる。他の石器でも大形石刀を遺跡内に持ち込んで、さらに剥片剥離作業をしたと思われる接合資料もある。



図20 寺方遺跡出土ナイフ形石器・楔形石器①



図21 寺方遺跡出土楔形石器②



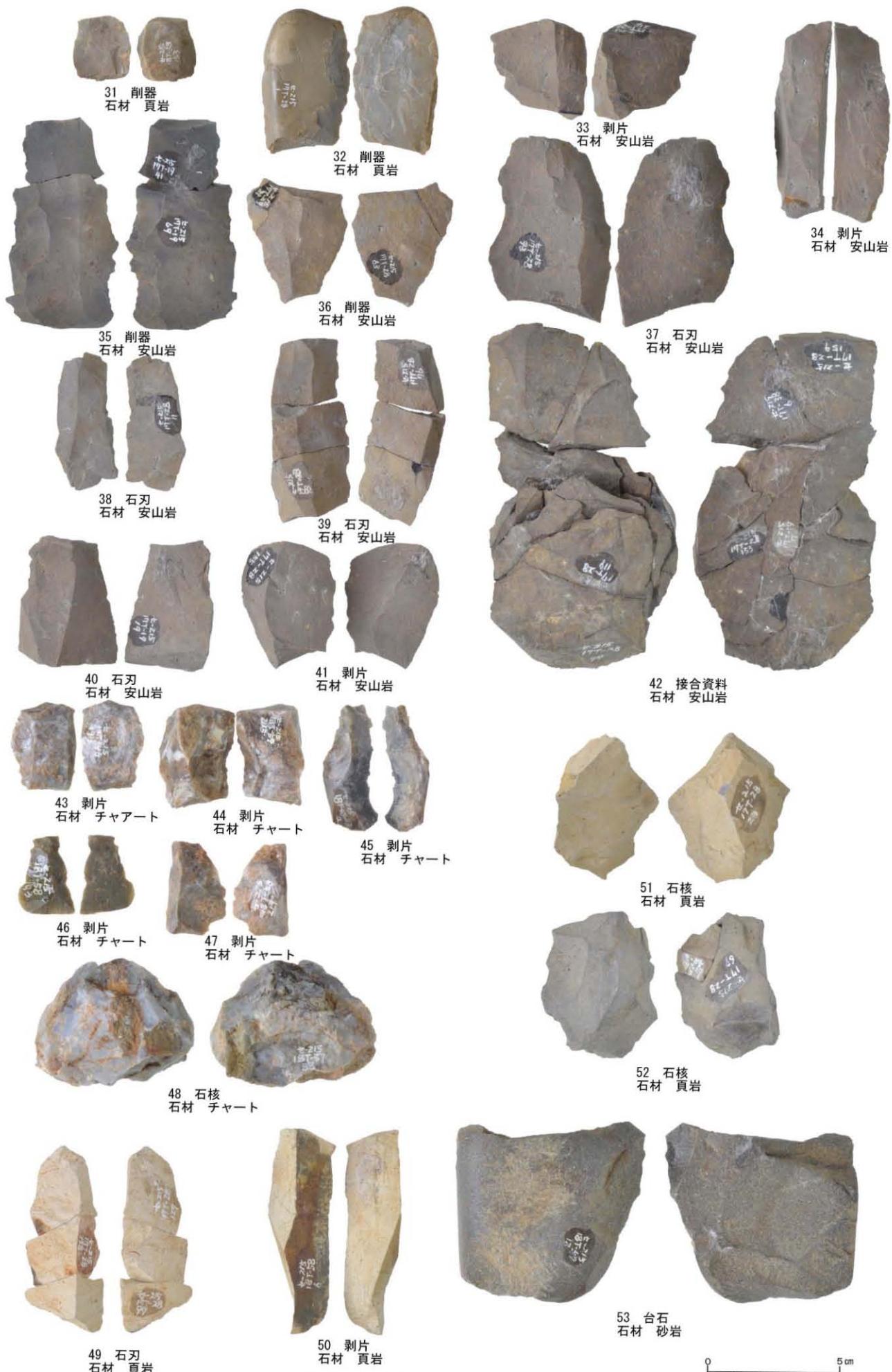


図22 寺方遺跡出土その他の石器

0 5 cm

中台柿谷遺跡

柿谷遺跡は、遠山天ノ作遺跡から北西へ2km隔てた所の、標高42mを測る平坦面が広がる下総上位面の台地にある。旧石器時代石器群は遺跡南部の台地縁に近い所から、2箇所の遺物集中地点が検出された。出土層位は報告書ではVII層となっているが、石器群の構成からIX層相当と思われる。第1群からは局部磨製石斧、第2群からは楔形石器が4点出土した。石材構成は黒曜石、頁岩、チャート、砂岩などである。楔形石器3点は2cm以下ではほぼ方形で完成品と思われるが、4は橢円形で大きく、未完成品と思われる。

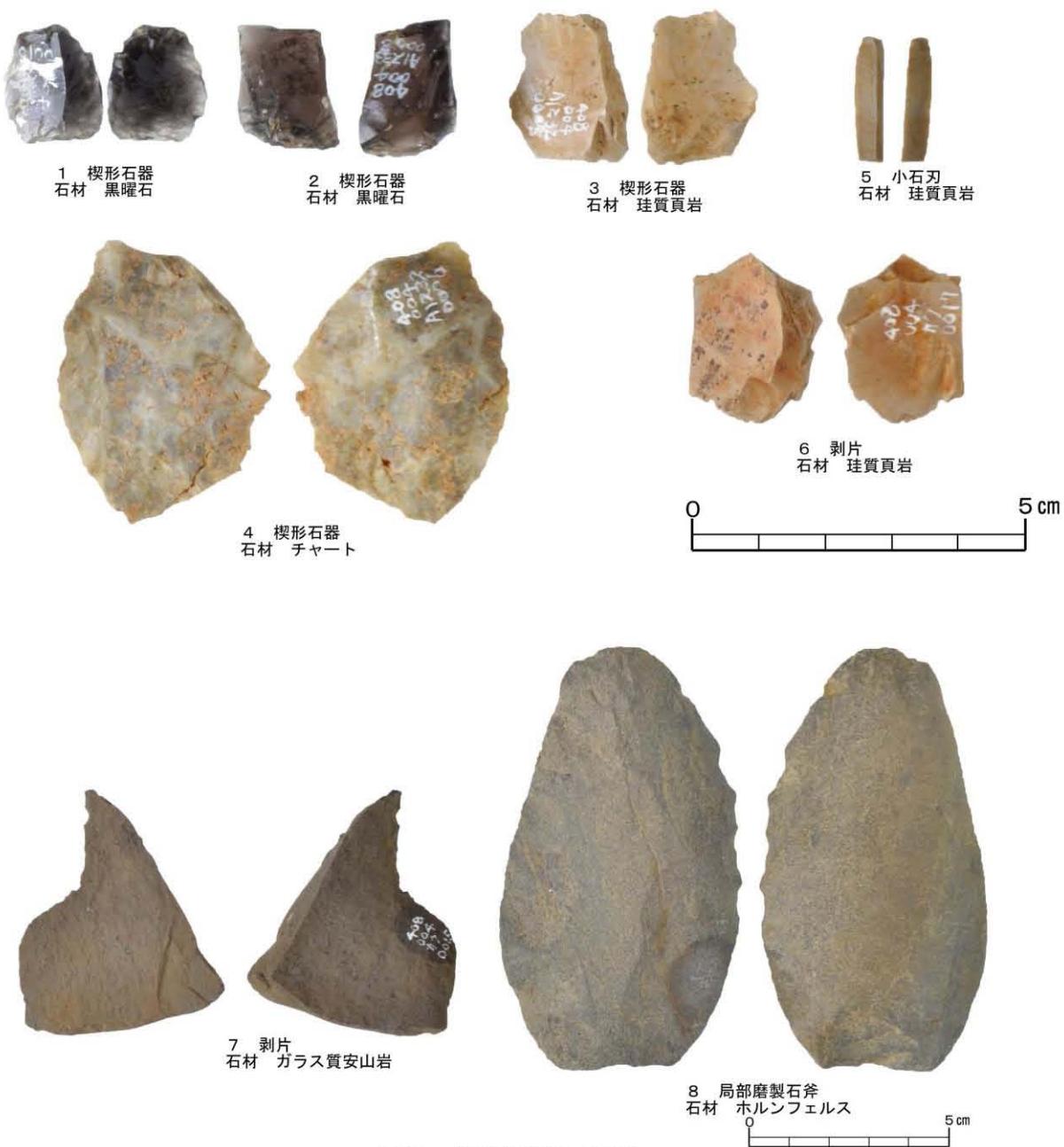


図23 柿台遺跡出土石器

鍛冶屋台遺跡

鍛冶屋台遺跡は、宮ノ前遺跡と寺方古墳群との間の標高30mの台地にあり、南北250m、東西200mの台地上のほぼ中央部に旧石器時代遺物集中地点が3箇所検出された。石器集中地点はいずれもIX層で、このうち東と中央に位置する集中地点は、分布密度は低いが、径10m程の環状ブロックの様に石器が分布する。石器群の構成は局部磨製石斧1点のほかは、石刀と石核で楔形石器はない。石材構成は黒曜石、安山岩、チャートがある。

本遺跡の石器群には楔形石器を含まないが、周辺遺跡及び出土層位との関連から、近接する石器群と思われるため、参考として取り上げた。



図24 鍛冶屋台遺跡IX～X層出土石器

四ツ塚遺跡

四ツ塚遺跡は、山武市松尾町谷津字四ツ塚に所在し、九十九里浜に流下する木戸川左岸の、標高40~41mの下総上位面台地に立地し、遠山天ノ作遺跡とは300mほど離れている。旧石器時代石器群はVII~IX層(第2黒色帶下部、IX~X層)から38箇所のブロック(遺物集中地点)が検出され、それらが2つのドーナツ状に並ぶ環状ブロックであった。遺物は計2,200点有り、局部磨製石斧、ナイフ形石器、台形石器などに混じって楔形石器が78点出土した。中でも第4ブロックでは20点の楔形石器が有り、これを下図に示した。石器素材は円礫が多く、特に楔形石器は小円礫を両極打撃で制作し、その未成品が多くある。石材では、チャート、ガラス質安山岩、ホルンフェルス、砂岩、流紋岩、珪質頁岩などがあり、台地下の段丘礫とほぼ同じ構成を示す。



図25 四ツ塚遺跡出土石器(千葉県教育委員会所蔵)

赤羽遺跡

赤羽遺跡は、山武市松尾町古和字牛ヶ谷に所在し、九十九里浜に流下する木戸川右岸の標高12mの低位段丘(千葉段丘)上に立地する。旧石器時代石器群は南北40m、東西95mと、南北30m、東西45mの大きさで2つの遺物集中地点が、第2黒色帶相当層から検出された。石器は台形様石器、石斧、ナイフ形石器、削器に楔形石器があり、それに敲石、石刀が加わる。ナイフ形石器は石刀を素材としているが、楔形石器の多くは円礫を素材とし、礫面を残した未成品が多くある。石材はチャートが最も多く、次いでガラス質安山岩、瑪瑙、珪質頁岩、流紋岩、砂岩、ホルンフェルス、珪岩など、遺跡下の段丘礫とほぼ同じ構成を示す。とくに本遺跡の下層には、低位段丘の段丘礫層が発達していたことを、調査中に確認していて、遺跡の直ぐ下が石材産地であったことが、この遺跡立地に有利に働いたと思われる。



図26 赤羽遺跡出土石器①(千葉県教育委員会所蔵)



図27 赤羽遺跡出土石器②(千葉県教育委員会所蔵)

鷺山入遺跡

鷺山入遺跡は、山武市の西部、成東から入る作田川上流域の標高48mの下総上位面台地にあり、8箇所の石器集中地点が検出され、その内2群6箇所から楔形石器を構成する石器群が検出された。この石器群はIXa層を出土層位とし、3箇所ずつある2群は8mの間隔があるが、接合関係が認められるところから、同時期と考えられる。石器構成はナイフ形石器23点、削器16点、楔形石器50点、石材構成は黒曜石(高原山産)が最も多く、次いでガラス質安山岩、瑪瑙、頁岩が続く。石器素材に円礫はなく、石核も少なく、持ち込まれた剥片を遺跡内で加工したと思われる。楔形石器とされる石器は、大きさが2.0~6.5cmと幅があつて大きい程形が不整形で、2.5cm前後のものが方形で整形されているものが多い。

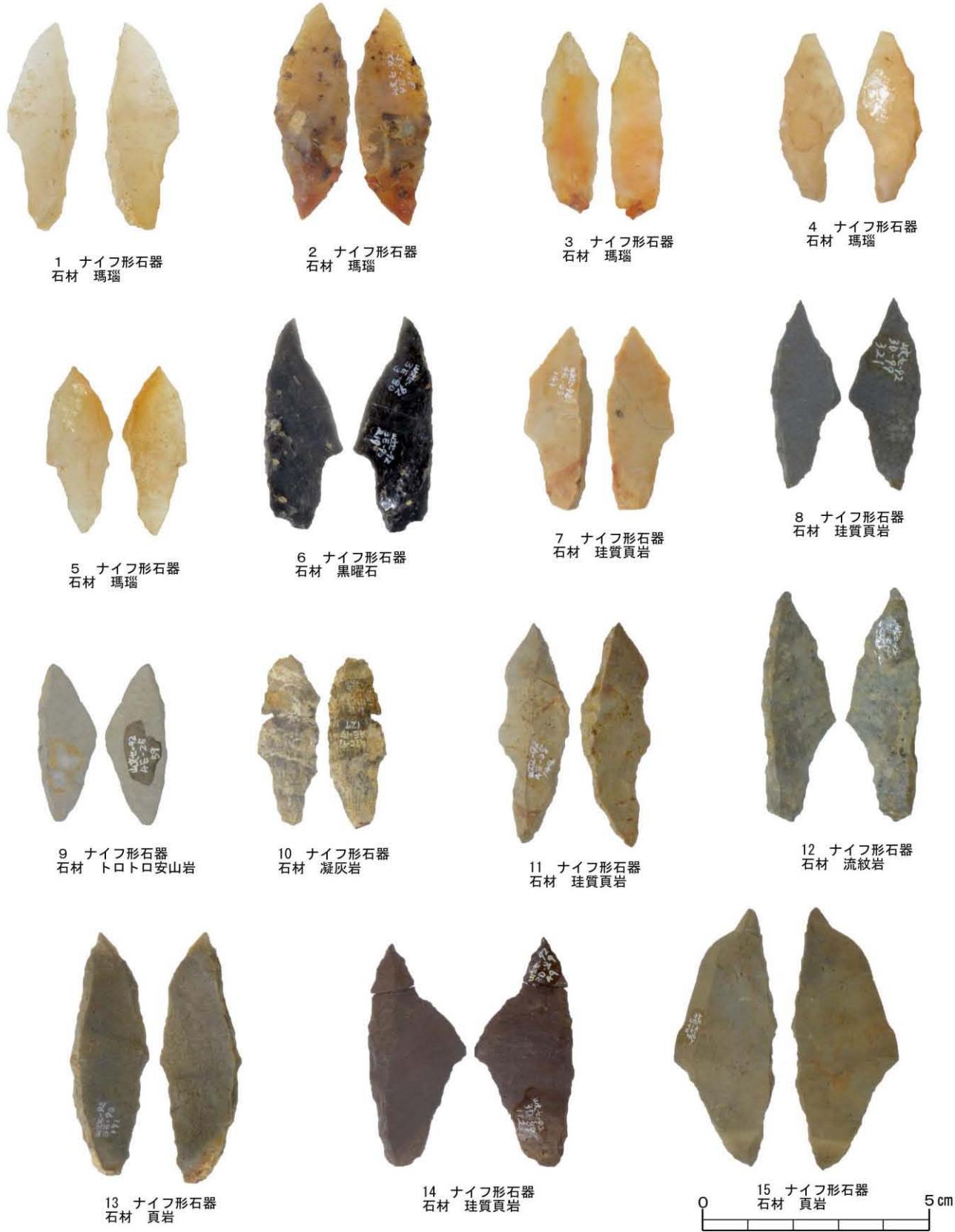


図28 鷺山入遺跡第2文化層出土ナイフ形石器(山武市教育委員会所蔵)

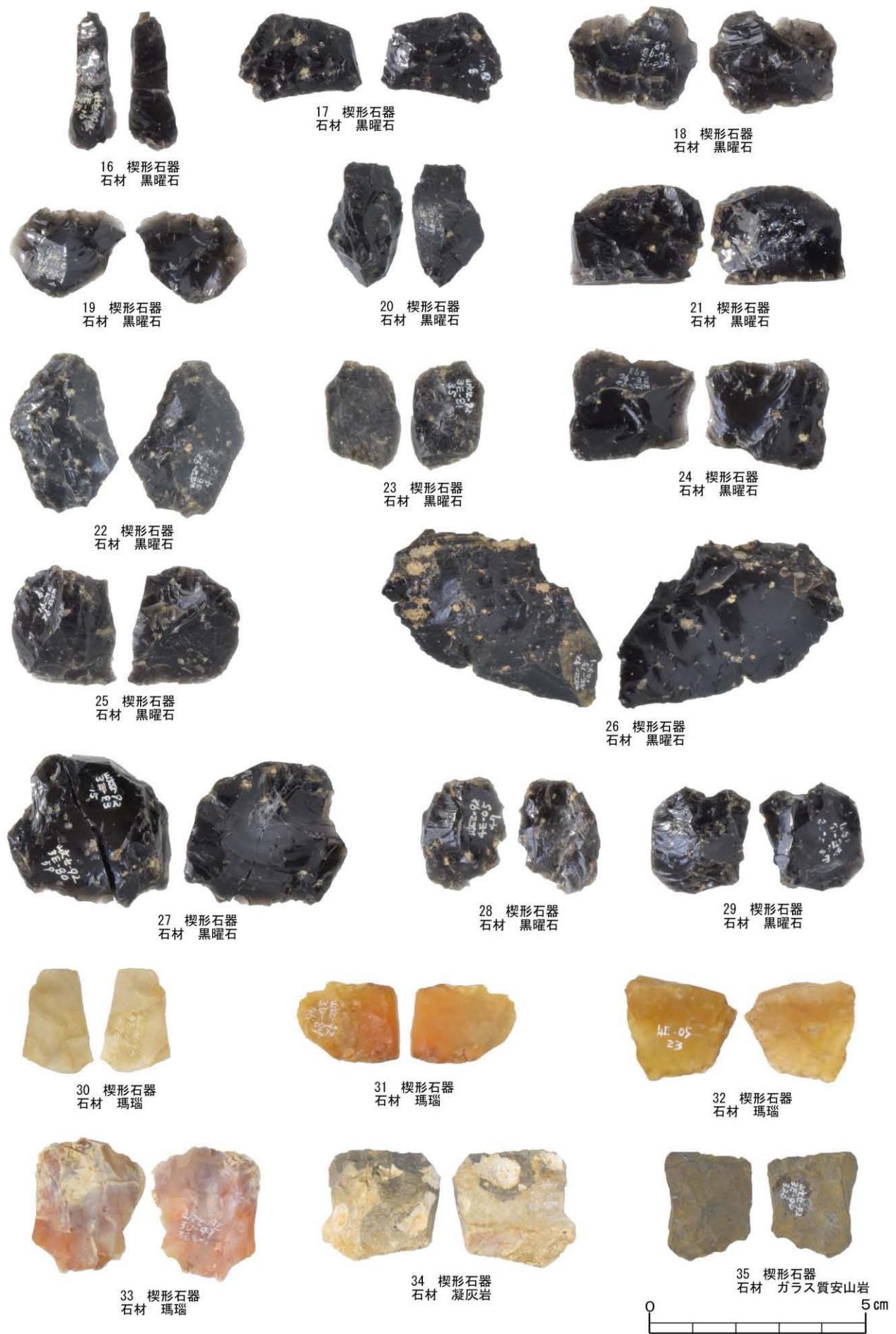


図29 鶩山入遺跡第2文化層出土楔形石器①(山武市教育委員会所蔵)



36 楔形石器
石材 貝岩



37 楔形石器
石材 ガラス質安山岩



38 楔形石器
石材 ガラス質安山岩



39 楔形石器
石材 貝岩



40 楔形石器
石材 貝岩



41 楔形石器
石材 硅質貝岩



42 楔形石器
石材 ガラス質安山岩



43 楔形石器
石材 流紋岩



44 楔形石器
石材 凝灰岩



45 楔形石器
石材 貝岩



46 楔形石器
石材 貝岩



図30 鷺山入遺跡第2文化層出土楔形石器②(山武市教育委員会所蔵)

千田台遺跡

千田第遺跡は、多古町水戸字千田台に所在し、栗山川支流の多古橋川と高谷川に挟まれた、標高40m前後の台地上に在り、遺跡はこの台地の頂部から南西に傾斜した所で、27箇所の石器集中地点が検出された。石器群の出土層位はVII層からVI層で、VI層下部に属するとされる。このVI層からは1,590点の石器が出土し、ナイフ形石器、台形様石器、楔形石器、搔器、削器などで構成される。この石器群の特徴として、大形石刃を素材として、これを切斷してさらに小石刃を剥離したり、切斷石刃を素材として楔形石器を生産していることである。楔形石器は78点を数え、大きさは縦2cm台から3cmぐらいが多く、他の楔形石器主体の石器群から比較すると大きめである。楔形石器の形態としては、2.5cm前後の扁方形のもの(17)を代表とする完成形態が数点有り、ほかに示さなかつたが柱状のものもある。石材は、珪質頁岩が最も多く(35%)で、次いで黒色ガラス質安山岩、黒曜石、ホルンフェルス、チャート、流紋岩、砂岩がある。



図31 千田台遺跡出土石器(千葉県教育委員会所蔵)

出口遺跡

出口遺跡は、香取市多田字出口に所在し、利根川に注ぐ小野川等に刻まれた標高39m前後の台地上の中ほどに立地する。遺跡からはVII層の第1文化層とIV層下部の第2文化層が検出され、このうち第1文化層から楔形石器181点を含む3,182の石器が出土した。石器は楔形石器のほかは無く、素材は小円礫と思われるものが多く、従って石材ではチャート、珪岩、ガラス質安山岩、石英、流紋岩、砂岩など多様である。本遺跡の楔形石器については、新田浩三(1991)が報告書の中で、調整部位によって3形態に分類し、また、制作過程を3類型に分類、それぞれ2~3段階の制作過程における実例をあげている。これによって楔形石器のそれぞれにおける形態の未成品、完成品の判別が明らかにされた。さらに遠山天ノ作遺跡の資料と合わせて、小円礫素材の楔形石器制作を遠山技法として提唱した。下の写真は本遺跡出土の楔形石器全てではないが、完成形態は2cm以下の扁平方形の物が多く、不定形で大振りなものは未成品と見ることができよう。



図32 出口遺跡出土楔形石器①(千葉県教育委員会所蔵)



図33 出口遺跡出土楔形石器②(千葉県教育委員会所蔵)

東峰御幸畠西遺跡

東峰御幸畠西遺跡は、成田市東峰御幸畠に所在し、利根川に流れる取香川の支流に浸食された標高40mの台地上に立地する。本遺跡からは4つの文化層から49箇所の遺物集中地点が検出され、その内VI～VII層の文化層から楔形石器を主とする石器群が2箇所検出された。本遺跡の楔形石器は小円礫を素材とし、礫面を大部分残す未成品(6)から、完成品と思われる石器(1・2)があり、完成形に近づくにつれ小さくなる。石材はチャート、珪質頁岩、凝灰岩、珪岩などである。



図34 東峰御幸畠西遺跡出土楔形石器(千葉県教育委員会所蔵)

大林遺跡

大林遺跡は、佐倉市井野町大林に所在し、印旛沼から入る谷の谷頭部の標高26mを計る比較的平坦な台地上に立地する。本遺跡からは7つの文化層から計36箇所の遺物集中地点が検出され、その内のVII層(第2黒色帶)の第6文化層から、楔形石器を多く構成する石器群が検出された。石器はほかにナイフ形石器、削器、錐があり、素材は剥片が多く、石材では珪質頁岩、ガラス質安山岩、凝灰岩などがある。楔形石器の大きさは2cm以上で、完成形は扁平方形で微細調整がある。



図35 大林遺跡出土楔形石器 (千葉県教育委員会所蔵)

草刈遺跡

草刈遺跡は、市原市ちはら台西に所在し、東京湾に注ぐ村田川右岸の標高27~40mの下総上位面台地に立地する。草刈遺跡全体では7枚の文化層から98箇所の旧石器時代遺物集中地点が検出された。このうちC地区の第4文化層(VII~IX層上部)から検出された15箇所の遺物集中地点(ブロック)が、楔形石器を多く含む石器群である。石器構成は楔形石器のほかはナイフ形石器、削器を含む程度で、石材では頁岩、珪質頁岩が多く、黒曜石、瑪瑙、ホルンフェルス、砂岩などが次ぐ。小型の楔形石器は方形の細かく調整され関係と言えるが、ホルンフェルス製の大形(15・16)は石核の可能性も考えられる。



図36 草刈遺跡C地区第4文化層出土石器(千葉県教育委員会所蔵)

4. 縄文時代の楔形石器

日本では縄文時代の楔形石器の方が早くから見いだされ、石鏃の素材や石核としての見方が考えられ、これを単独での石器としてその機能、用途の研究までは進んでいない。千葉県内でも草刈遺跡B地点、聖人塚遺跡、中山新田Ⅰ遺跡などの中期遺跡から、多くの楔形石器が見いだされているが、それらを概観すると石鏃の素材加工の途中形態の様なものが多い。それに対してここに提示した資料は横芝光町内から出土した楔形石器で、いずれも縄文時代中期を主とする遺跡からの物である。また、どれも円礫を素材として両極剥離で作られ、旧石器時代のものと同様の技法と言える。特に1~3の東長山野遺跡出土の石器は、数度の両極剥離が行われ、楔状の形状を作り出している。また、同遺跡では範状石器が多く出土していて、それとの形態、刃部形状等に共通性も考えられ所から、その加工途上の石器ということも推定される。

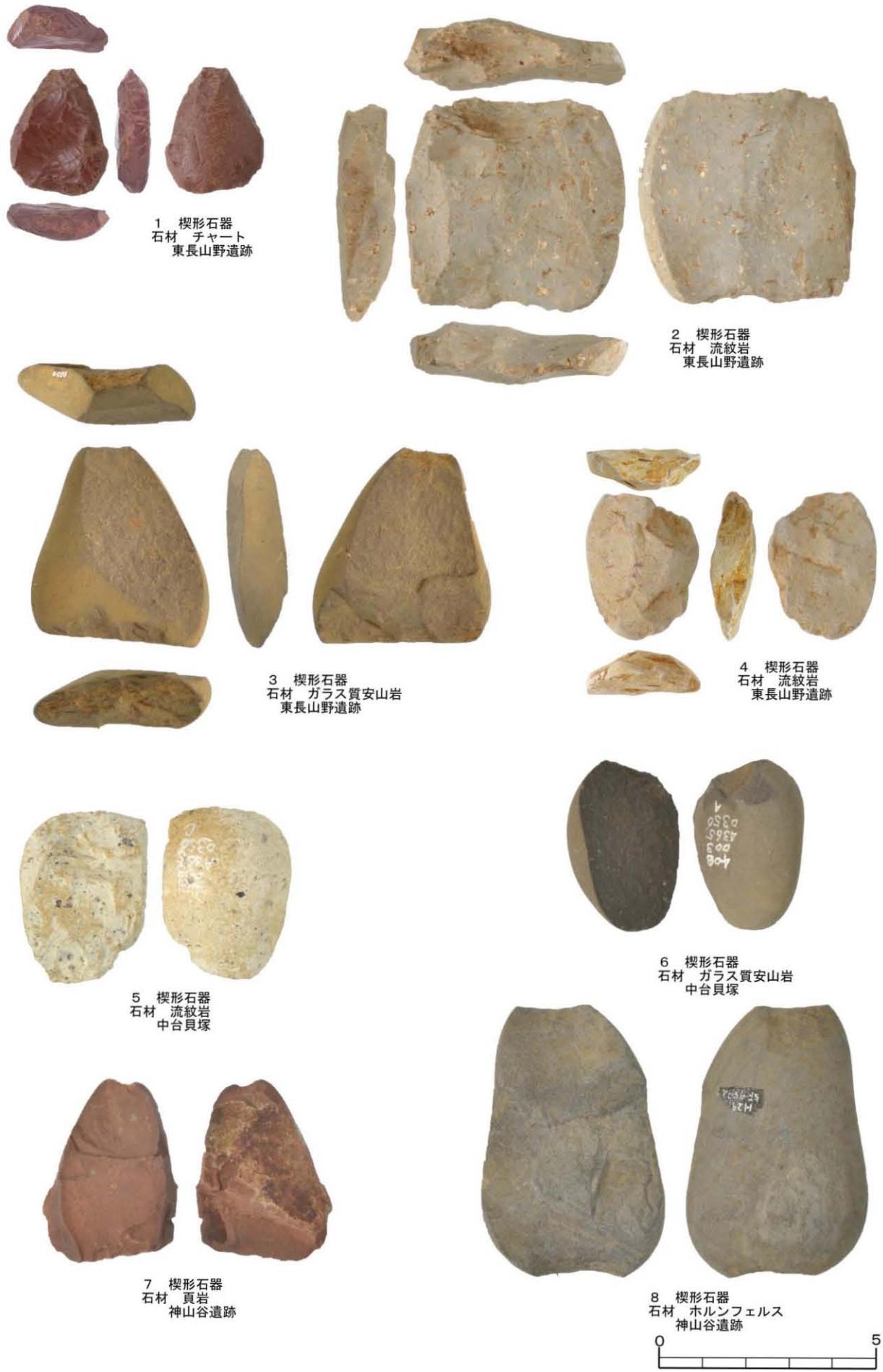


図37 繩文時代の楔形石器

5. 千葉県旧石器時代楔形石器の考察

(1) 楔形石器の形態

ここでは千葉県内AT降灰以前の旧石器時代で楔形石器出土遺跡52箇所のうち、多く出土している11遺跡を取り上げ紹介した。全体の中から見れば少ない数で、これで楔形石器の全容を語ることはできないが、ある程度の予測がついたと思われる。特に先に楔形石器について簡単にまとめた道澤(2017)で、千葉県内の楔形石器を集成したところ、この形態、数値に共通性を認めることができた。しかし、この時点では遠山天ノ作遺跡の資料は全て見ていなかったので、この遺跡での共通形態、数値のものがないことに違和感を感じた。それが今回の企画に際して遠山天ノ作遺跡の資料をほとんどを見直したところ、報告書に掲載されていない楔形石器が多く有り、それらが想定した共通形態・数値に当てはまるものであることに改めて納得させられた。遠山天ノ作遺跡では本書図9～12・17において20点が完成形の楔形石器で、そのうちの16点が方形、2点が柱状であった。数値としては縦1.5～2.8cm、横0.9～2.2cmの範囲に分布し、ある程度まとまりを有している。ほとんどが両極打法による調整で、90度回転しての測辺調整は1点のみ(図17-3)であった。また、2点の柱状形態(図12-25・26)は、四ツ塚遺跡や出口遺跡でも認められ、一定量存在すると思われる。出口遺跡では縦・横関係が比例しているが、縦2.0cm、横1.5cmを分布中心として、縦が少し長い形態分布である。赤羽遺跡でも縦・横関係が比例するが、こちらではどちらも2.5cmを中心に分布する。楔形石器を多数出土した3遺跡の石器計測分布を見ただけであるが、いずれも2cm前後に多く分布し、この大きさが楔形石器の共通した完成形と思われる。石器の厚さではいずれも0.5～0.9cmが多く、1cmを超えるものはほとんどない。楔形石器のこの形態・数値から推定すると、単独での使用ではなく、柄に複数装着しての複合石器か、一時に複数使用の石器と考えた方が妥当ではないか。

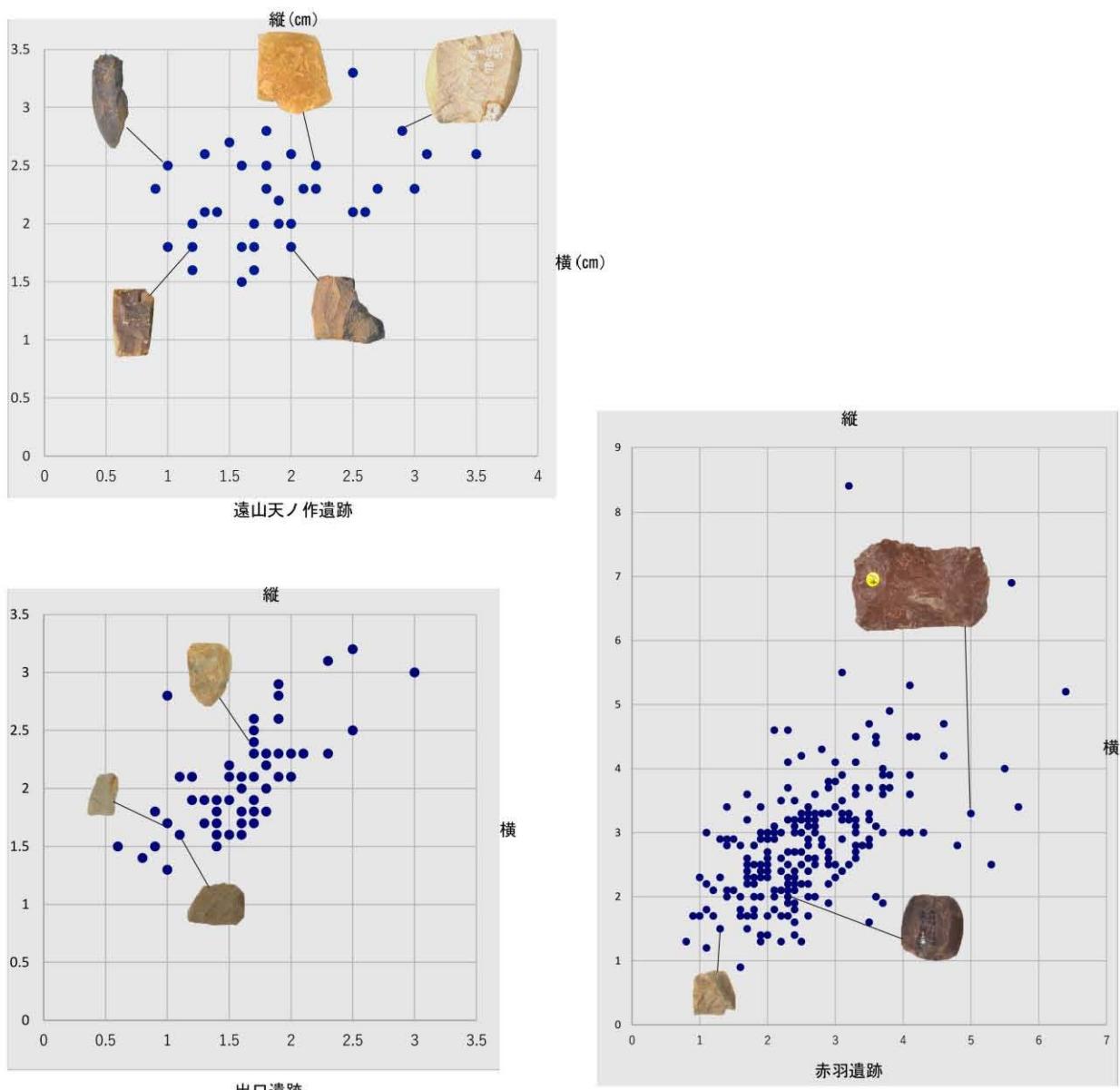


図38 主な遺跡の楔形石器縦横分布

(2) 楔形石器の地域分布と時間的分布

楔形石器は、千葉県内では下総台地東半分に多く分布し、特に東部へ行く程その濃度を増す。また、出土層位ではVII層からIX層上部で多く、IX層下部ではほとんどなく、VI層より上位になると少なくなる。この地域的な偏りは下総台地の印旛沼以西になると、同層位であっても少なくなるかほとんど含まない遺跡が多くなる。さらに隣接の武藏野台地や常総台地では全くと言っていいほど見ない。そして、他地域で見られるのは長野県野尻湖畔の貫ノ木遺跡で多数出土し、西では奈良県の二上山遺跡群で裁断面のある石器として取り上げられている。貫ノ木遺跡はまた多数の局部磨製石斧が伴い、後期旧石器時代初期の遺跡であることが確認されている。二上山遺跡群では国府型ナイフ形石器に伴い、AT降灰直後と思われる。この両者では貫ノ木遺跡が注目される。千葉に戻って、下総台地の楔形石器を含む石器群は、後期旧石器時代前葉に見られるが、その初期段階のX層ではあまり見られない。IX層になると含まれるようになり、VII層下部でピークに達する。このX層は台形石器や局部磨製石斧を代表とする石器群で、日本の後期旧石器時代初頭の特徴を示している。IX層になると石斧にナイフ形石器、楔形石器を伴うようになり、遺跡は遺物集中地点が環状に分布する環状ブロックを形成して大型化する。環状ブロックを形成する遺跡では、一方で石斧が少なくなると同時に楔形石器の増加を示す。この石斧が少なくなると楔形石器が増えるのが、何か用途上で相関があるのかもしれない。本町内の鍛冶屋台遺跡の石器群は楔形石器を伴わず、局部磨製石斧がある石器群で、点数は少ないが遺物の分布は環状を示す。一方、鷺山入遺跡は二側縁加工ナイフ形石器が主体を成し、楔形石器は比較的大振りになって、その大きさも不揃いになっている。このように下総台地東部に多く出土している楔形石器を集成してみると、必ずしも一様ではなく、その石器組成の変化と遺跡の形態とともに変化していることが分かる。この変遷を簡単に示したのが以下の図である。これは下総台地の後期旧石器時代前半にあたり、最も上の第1段階は、台形石器、局部磨製石斧を代表とする石器で構成され、楔形石器は含まず、遺跡によっては東峰御幸畠西遺跡のように環状ブロックを形成している。第2段階は、今のところ柿台遺跡が認められるのみで、石斧に楔形石器が出現する段階と思われる。第3段階は、四ツ塚遺跡などナイフ形石器があるが、石斧は少くなり、それに代わって楔形石器が多くなる。環状ブロックを形成している遺跡が多い。第4段階は遠山天ノ作遺跡に代表される石器群で、石斧はなくなり、楔形石器は小さいものが大量に作られる遺跡が多く、環状ブロックは形成しなくなる。遠山天ノ作遺跡で出土した台石は、局部磨製石斧を研いだと思われる面が残り、前段階の伝世品と推定されると、前後のつながりを考える上で面白い資料である。

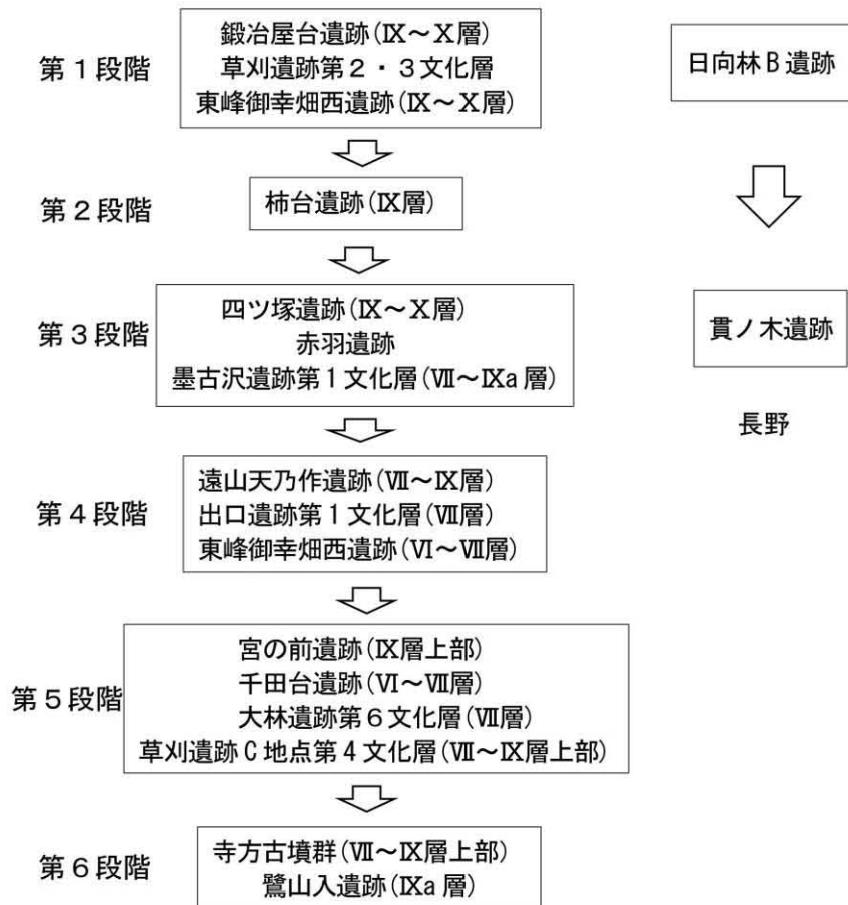


図39 下総台地における後期旧石器時代前半、楔形石器を含む石器群の変遷

第5段階は、千田台遺跡などのようにナイフ形石器に楔形石器を含む石器群で、石器素材に石刃を多用し、楔形石器の素材には前段階で多用した小円礫を使わなくなる。そのためか楔形石器の大きさに企画性がなくなり、大きいものが増えて来るが、これが楔形石器としての完成品か疑問が残る。第6段階は第2黒色帶上部を出土層準とする石器群で、鷺山入遺跡を代表とし、二側縁加工のナイフ形石器を主体に楔形石器を伴う。石材は黒曜石、珪質頁岩、瑪瑙など比較的上質な石材を使い、楔形石器の素材も剥片を多用し、大きさは不揃いである。この段階以後、AT(姶良丹沢火山灰)降灰前後以降になると楔形石器はほとんど見られなくなり、たまに遺跡ごとに1~2点見られるぐらいとなる。

安蒜(2017)では、環状ブロックと局部磨製石斧とを関連づけて、日本列島に渡って来た旧石器人が、独木舟制作の場と道具であったと推測し、下総台地にそれが多いのは外洋に接していることが大きな特徴であるとした。下総台地にはこれまでに20箇所以上の環状ブロックが発見され、局部磨製石斧の使用について最も説得力のある説である。それらの遺跡が下総台地東部に多く、それを継承するかの様な楔形石器石器群もまた東部に多いことは、後期旧石器時代前葉における社会生活の変容と石器文化の変革とを示している例であり、決して単にこの地域の石材獲得環境の厳しさだけでは決められないことだろうと考える。

(3) 楔形石器の制作方法

楔形石器の制作については、田村(1989)によって大林遺跡等を例としてその生産体系を「遠山技法」と提唱し、新田(1991)で出口遺跡出土資料をもとに分類、過程などを示している。しかし、実際遠山天ノ作遺跡の資料を実見すると、楔形石器及び未成品、類似品以上に、失敗品が多く有ることが分かった。楔形石器を作る基本として、素材を台石の上に載せ、素材を上から敲石で打撃し、上下両極から剥離する両極打法で作る。これを制作実験して分かったことであるが、特別に高度の技術的な方法は必要とせず、両極打撃剥離することができるが、その結果は素材によって偶然であることが大きい。即ち素材が良ければ良好な剥離ができ、悪ければそれで失敗し終了である。また、素材によってか、敲石の打撃点から剥離するか、台石側から剥離するかも偶然である。さらに2度目の打撃では1度目の剥離辺からまた剥離し、反対辺からの剥離は難しい。この剥離を両極打法と言うが、実験では敲石辺と台石辺と同時に剥離することはあまりない。



楔形石器制作実験



楔形石器制作実験素材試料



楔形石器制作実験台石(石材　頁岩)



楔形石器制作実験敲石

図40 制作実験試料

実験の結果写真が下のとおりである。素材試料のほとんどは小円礫で、石材はチャート30点、瑪瑙2点、石英4点、剥片素材では頁岩1点、黒曜石4点を使用した。円礫では扁平なもの程割りやすく、球形に近いものは割れなかった。チャート石材では礫表面だけでは良否は判断できず、割ってみて初めて石材のよしあしが分かる。その点、瑪瑙と石英では形状を除けば良否に関係なく旨く剥離することができた。前に述べたように1回の打撃で敲石辺か台石辺のどちらかが剥離し、剥離辺が鋭くなつた方が2回目以降の打撃でも剥離しやすく、上下逆転しても同じである。従つて剥離しない辺を剥離することは打撃に工夫が必要になる。その点、頁岩や黒曜石の剥片素材は剥離しやすく、楔形石器を制作するのは容易である。約40点程を両極打撃の剥離実験したが、石刃剥離や槍先形尖頭器制作の平坦剥離、石鏃制作の押圧剥離に比べれば技術的な習熟度は必要なく、簡単な打撃のコツさえつかめばできる剥離で、技法とまで言える技術ではない。しかし、楔形石器の完成品を作り出すことは容易ではなかった。



図41 楔形石器制作実験結果試料

参考文献

- 安蒜政雄 2017『日本旧石器時代の起源と系譜』有山閣
岡村道雄 1979「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
奥田正彦・高橋博文 1986『遠山天ノ作遺跡 主要地方道成田松尾線Ⅲ』千葉県文化財センター
小菅将夫 2005『環状ブロック群 —3万年前の巨大集落を追う』笠懸野岩宿文化資料館
齋藤 岳 2011「両極打法とピエス・エスキュー(楔形石器)についての研究史」『研究紀要』
第16号 青森県埋蔵文化財調査センター
島立 桂 2003「市原市草刈遺跡(東部地区旧石器時代)」『千原台ニュータウンX』財団法人
千葉県文化財センター
田島 新 2003「松尾町赤羽遺跡 旧石器時代」『千葉県東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書12』
財団法人千葉県文化財センター
田村 隆 1989「第2章佐倉市大林遺跡 第2節先土器時代 第6章収束」『佐倉市南志津地区埋
蔵文化財発掘調査報告書1』千葉県文化財センター
新田浩三 1989「遠山天ノ作遺跡の再検討」『竹べら』第3号 北総竹べらの会
新田浩三 1991「出口遺跡 旧石器時代 出口遺跡第1文化層出土の楔形石器について」『東関東
自動車道埋蔵文化財調査報告書VI』財団法人千葉県文化財センター
道澤 明 2017「楔形石器について」『旧石器時代の知恵と技術の考古学』有山閣
矢本節郎 1996「旧石器時代」『多古町千田台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
吉田直哉 1999『鷺山入遺跡 先土器時代』財団法人山武郡市文化財センター
吉田政行 2004「両極剥離技術と楔形石器」『石器作りの実験考古学』学生社

おわりに

今回の企画展では、この地域の多く分布する楔形石器について取り上げ、楔形石器の主なものを集成し、さらに楔形石器の制作実験を通して分かったことは、この楔形石器が剥片剥離の石核とか石器の二次的素材ではなく、楔形石器をある道具として使うために意識的に作り出されたということである。そしてこの石器がある程度幅を有する時期の、特定される地域に分布したことは、一つの文化あるいは文化圏を有していたとしてもおかしくない。今回は種々の制約があって、この地域の楔形石器を網羅することはできなかったことと、遠山天ノ作遺跡の全資料をもっと早く見ておかなかつたことが悔やまれる。特に遠山天ノ作遺跡は、近くに赤羽遺跡、四ツ塚遺跡と関連性が強く伺われる重要な遺跡があり、それとの比較を十分にすれば、また新たな知見が得られたこも知れないと。今後、これを機会に楔形石器について、さらに議論、研究が進められることを期待する。

最後に本企画展を開催するに当たり、下記の関係機関のご協力を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

千葉県教育委員会、千葉県教育庁教育振興部文化財課、山武市教育委員会、山武市歴史民俗資料館

令和元年度企画展 謎の石器 楔形石器 展示図録

発行日 令和元年10月5日

編集・発行 横芝光町教育委員会

印刷 三陽メディア株式会社

